

## 院政期における伊勢平氏庶流

——「平家」論の前提作業——

野口 実

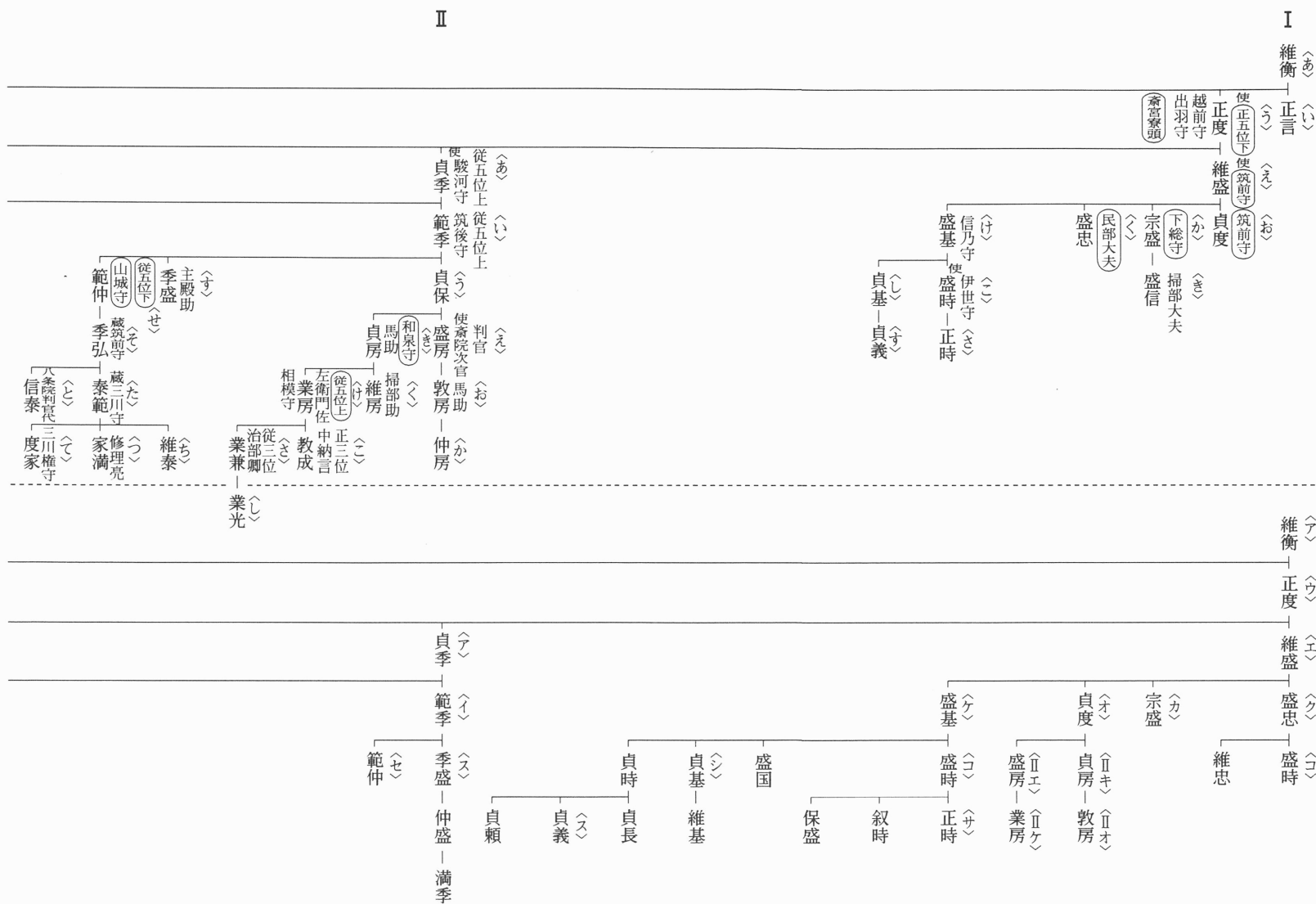
はじめに

平家にたいする歴史的な評価は『平家物語』によるイメージが投影されていて、実証性に欠ける部分がまみられる。その一つが、伊勢平氏庶流をも含めて平家をあたかも運命共同体のごとく捉える見方である。

本稿では「平家」を白河院に登用された正盛からの子孫と規定し、それ以外の伊勢平氏諸流の個々の人物を系図と対照させる形で記録から渉獵し、もってその軍事貴族・武士としての存在形態、平家との関係を明らかにする材料に資するための作業を行いたい。

伊勢平氏諸（庶）流の世系を示す史料として取り上げたのは、中条家文書『桓武平氏諸流系図』（井上鋭夫編『新潟県文化財調査報告書十 奥山庄史料集』新潟県教育委員会、一九六五年・中条町史編さん委員会編『中条町史 資料編第一巻』一九八二年、所収）と『尊卑分脉』（新訂増補国史大系）所収である。後者は当該記の系譜史料としてまず第一に使用されるものであり、また、前者がそれと同等以上の価値を持つことは、かつて指摘したところである（拙稿「古代末期の武士の家系に関する二つの史料——永承二年二月二十一日付「藤氏長者宣」と中条家文書『桓武平氏諸流系図』——」拙著『中世東

— 白



## 『尊卑分脉』

2

まず、この二つの系図（『桓武平氏諸流系図』は正衡流を載せない）における伊勢平氏庶流の系統を対照させる形で示した上で、個々の人物の閥歴の所見を記録から渉猟する作業を進めたい。なお、系図の注記には『桓武平氏諸流系図』における官位のみを記した。また、記録の所見博搜の時間的範囲は概ね平家政権成立直前の時期までとした。



## VIII



## I 維衡―正度―維盛流

〈あ〉維衡 かれの関歴については、高橋昌明『清盛以前 伊勢平氏の興隆』（平凡社、一九八四年）第一章一「維衡と致頼」に詳しく、また、そこで触れられていない点についての補足は旧稿「平貞盛の子息に関する覚書―官歴を中心として―」（拙著『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、初出一九七八年）で行なっているので、ここでは省略に委ねる。

〈う〉正度 『太神宮諸雜事記』、『維摩会講師研学豎義次第』、『鎌倉遺文』三八一〇号によって、越前守が最終官で、治暦三年（一〇六七）にはすでに死去していたことや娘が藤原行成の子の甲斐守永親に嫁して興福寺三会講師行賢らがその所生であることなどが知られる（高橋昌明『清盛以前』四八頁）。

〈え〉維盛 『尊卑分脉』に検非違使・駿河守とあるが、このことと駿河守の任終が康平五年（一〇六二）であったことは『朝野群載』巻十一所収長久四年（一〇四三）十一月二十七日「復本官本位宣旨」、同巻二十六所収承保二年（一〇七五）十二月二十日「越勘宣旨」によって明らかである。また、治暦三年（一〇六七）年三月三日、伊勢国菟芸郡稻生社の祭礼の日に、検非違使河内常重と駿河前司維盛および左衛門尉季衡の従者らが口論に及んだことを契機に発生した在地紛争や、延久元年（一〇六九）、維盛が副將軍として伊勢国飯高郡河俣山にこもった「強盜」散位紀為房一族追討にあたったことも、すでに高橋昌明氏が述べたところである（清盛以前 四八・五四―五頁）。このほか、『帥記』承暦四年（一〇八〇）四月二十二日条に、この日行なわれた直物にさいして、維盛の申文が提出されていたこと、『水左記』同五年九月二十四日条に「去日逝去」した駿河前司維盛室の喪に、この日記の記主源俊房が使者をつかわしたという記事が見える。

〈お〉貞度 かれの閥歴は米谷豊之祐「佐竹家の祖——源義業」(『古代文化』第五四卷第六号、二〇〇二年)に詳しい。その官歴を見ると、文章生から越中大掾→右衛門尉→検非違使を経て、叙爵の後に筑後守に任じている。また、『殿暦』嘉承二年(一一〇七)八月二十三日条によれば、かれは藤原忠実の家人であった。ちなみに、『中右記』永長元年(一一〇九)五月二日条によると、かれの郎等の流鏑馬は拔群であったという。

〈か〉宗盛 承暦三年(一一〇九)六月、山僧が祇園感神院に集結する事態にさいして鴨川の堤下に派遣された検非違使大夫尉平季衡・尉平季国・右衛門尉平正衡ら京武者たちの軍勢の中に右衛門尉宗盛の姿があったことや、この二ヵ月ほど前に関白藤原師実が賀茂社に参詣した時、かれが平氏一族の左衛門尉盛方・右衛門尉兼衡・左兵衛尉兼季らと共に舞人をつとめたことは、すでに高橋昌明氏が明らかにしている(『清盛以前』五〇―五一頁)。その後、宗盛については、『中右記』寛治三年(一一〇九)正月二十五日条から、この日、右衛門尉をもって検非違使宣旨を蒙ったことが知られる。同康和五年(一一一三)二月三十日条によると、かれは同職にあった源重房と検非違使巡任受領について相論し、「宗盛ハ右衛門尉并着座給爵位上臈、重房年臈并使□宣旨上臈、共右尉同日宣旨也」という事情が勘案された結果、下総守に任じられている。『殿暦』には長治二年(一一〇五)五月二日条と嘉承元年(一一〇六)十月二十八日条に、かれが下総守としてそれぞれ二疋の馬を献じた記事が見え、貞度と同様、藤原忠実の家人であったことが知られる。同嘉承二年九月五日条には下総前司として見える。その後、かれの名は『中右記』には永久二年(一一一四)三月二十六日条に見え、それ以降、四月は二・六日、五月は十三・十六・二十四・二十七日、六月は一・三・十八・二十・二十一・二十五・二十七・三十日の各条に所見する。同書および『殿暦』の同年七月二日条には、前下総守のかれが下女をもって舎弟散位盛基の宅に放火したという記事が見える。『中右記』同年九月三日条に「宗盛一日已死去」、同十一日条には「宗盛其身已死去」とあって、その死去の時点は明らか

である。

〈き〉盛信 『中右記』長承二年（一一三三）七月二十七日条に「伊勢河曲庄、盛信所勞無術之由所承也、然者其後預者如何」とあり、盛信が伊勢河曲庄預所をつとめていたことがうかがわれる。なお、『兵範記』仁安元年（一一六六）十月十日条に見える「摂津守盛信」は別人であろう。

〈く〉盛忠 『魚魯愚鈔』中巻（史料拾遺）第五巻、二五八頁に、平盛忠が「法勝寺功」をもって、右兵衛尉への補任を申請したことが見えるが年代が判然としない（同じ時に、平季房が允への任官を望む申文を提出している）。また、『兵範記』久寿三年（一一五六）年四月二十四日条に「東宮所衆盛忠」が見えるが、これは年代からみて明らかに別人である。

〈け〉盛基 『中右記』・『後一条師通記』寛治六年（一一九二）四月十八日条に「右兵衛尉」と見え、同じく翌七年三月十八日条によると、この日、かれは悪僧を搦めた勸賞によって右衛門尉に任じられている。『除目大成抄』第五（『新訂増補史籍集覧』別巻一、三六二頁）には、永久二年（一一二四）正月二十七日付の欠員になっている駿河守への補任を希望する盛基（散位従五位下）の申文が収められている。これによると、かれは永長二年（一一九七）に検非違使の宣旨を蒙り、康和五年（一一〇三）に叙爵しており、検非違使から受領を拝任する巡の第一位であり、すでに年齢も七十に及んでいるという。結果的に、この時、かれは信濃守に任じられた。なお、『中右記』康和五年二月三十日条には、「検非違使大夫」盛基が相模介に任じられたことが見える。永久二年（一一二四）、兄の宗盛と紛争を起こしたようで、『中右記』には、宗盛下女による盛基宅放火事件に関する記事が頻出する（四月二日、五月十三・十六・二十四日、七月二日、九月三・十一日条）。同元永元年（一一一八）閏九月九日条には「暁信乃守盛基五条烏丸宅焼亡、放火云々、近隣小屋已及一町也」と見え、このとき、かれが現任の信濃守であったこと、かれの京中

宅の位置、そしてその宅が再び放火されたことが知られる。

△△ 盛時 『長秋記』 元永二年（一一一九）六月二十八日条に、この日に行なわれた顕仁親王（後の崇徳天皇）所始にさいして、加え仰せられた侍五人のうちに「左衛門尉平盛時」の名が見える。ちなみに、ほかの四人は右衛門尉平盛康・左衛門尉平正弘・左兵衛尉平盛兼・同貞基で、いずれも伊勢平氏一族の面々であった。『中右記』および『台記』の保延二年（一一三六）十一月十日条によれば、この日に行なわれた除目のさい、鳥羽院からの申し入れにより、盛時男の政時が、盛時による殺害犯人逮捕の功を譲られた「別功賞」によって左兵衛権少尉に任じられている。

△△ 正時 保延二年（一一三六）の左兵衛権少尉補任については前項のとおり。『台記別記』仁平三年（一一五三）八月八日条によると、この日、左大臣藤原頼長の春日詣定・所宛が行なわれたが、東遊の舞人十人のうちに正時の名が見え、同十一月十七日条から、この日の調楽にも見参したことが知られる。同月二十六日が春日詣の当日であったが、このとき頼長に舞人として供奉したのは、左衛門尉源満清・右衛門尉平惟繁・同盛弘・左兵衛尉藤原宗時・同平正時・同平貞清・同平叙時・同時弘・右兵衛尉源重定・同源義定ら「良家子」であった（同書・『兵範記』同日条）。正時は、その後、おそらく衛門尉に任じたとみられ、ようやく保元三年（一一五八）二月二十一日の臨時除目で伊勢守に補任された（『兵範記』同日条）。二条天皇の踐祚を伝える『兵範記』の同年八月十一日条に「従五位下守伊勢守平朝臣正時」の名が見える。かれの伊勢守在任は複数回できわめて長期にわたったらしく、『山槐記』永暦二年（一一六二）四月十三日条の小除目の記事に「伊勢守平正時還着」とあり、また『兵範記』仁安四年（一一六九）正月十一日の除目入眼の記事中に「伊勢守平正時」と見える。

△△ 貞基 『中右記』元永二年（一一一九）四月十九日条に、齋院御禊の供奉人として「左兵衛尉平貞基」の



名が見える。同年六月二十八日の顕仁親王所始にさいして、加え仰せられた侍五人のうちに、かれの名が見えることは〈こ〉盛時の項で述べた。大治四年（一二二九）正月六日の叙位議で従五位下に叙されたことが『中右記』（同日条）に見える。

## Ⅱ 貞季―範季流

〈あ〉貞季 『桓武平氏諸流系図』に「長和三年（一〇一四）卒 年九十」とあるが、不審。高橋昌明氏は、「醍醐寺文書目録」（鎌倉遺文）八三号）に見える曾禰庄関係文書中に「駿河守名田請文 一通」とある「駿河守」が貞季に比定可能であることを指摘している（『清盛以前』七三―七四頁）。

〈い〉範季 『水左記別記』永保四年（一〇八四）正月十七日条に、前佐渡守平資範・前隠岐守同資季らとともに散位平範季の名が見える。『中右記』天永二年（一一二二）正月二十三日条の除目入眼の記事に「安房範季、覬」と見え、民部丞から安房守に任じたことが知られる。

〈え〉盛房 『魚魯愚鈔』中巻（『史料拾遺』第五卷、二五五頁）に、左兵衛少尉平盛房が見えるが、年代が判然としない。仁安二年（一一六七）正月二十七日、後白河院女御平滋子の家司職事侍等が補されたが、その中に無官者として平盛房の名が見える（『兵範記』同日条）。かれは、この年の十二月三十日の除目で主殿允を辞退している（同日条）。また、『山槐記除目部類』承安元年（一二七二）十二月九日条には「左近将監平盛房、麴」と見える。

〈お〉敦房 仁安二年正月二十七日、後白河院女御平滋子の家司職事侍等が補されたが、その中に左兵衛尉平敦房の名が見える（『兵範記』同日条）。

〈か〉仲房 『魚魯愚鈔』中巻（『史料拾遺』第五巻、二七〇頁）に、承安二年（一二七二）の春の除目にさいし、木工允平仲房が左馬允平清貞や文章生の散位平維基らとともに左右衛門尉を望む申文を提出したことが見える。

〈き〉貞房 保元二年（一一五七）三月二十六日に行なわれた祭除目で右馬助に補任され、翌年正月六日の叙位で従五位上に叙されたことが知られる（『兵範記』）。

〈く〉維房 保元二年秋の除目のさい、造宮の功によって右兵衛尉に補されている（『兵範記』同年十月二十九日条）。『古記』安元二年（一一七六）四月二十七日条に、後白河院が受戒のために比叡山に御幸した記事があるが、ここに院に従った北面の一人として掃部助平維房の名が見える。

〈け〉業房 後白河院の近習として鹿ヶ谷事件に名を見せ、一貫して反平家の立場にあったことで有名な人物である（米谷豊之祐「後白河院北面下臈―院の行動力を支えるもの―」同著『院政期軍事・警察史拾遺』近代文芸社、一九九三年、初出一九七六年 参照）。仁安二年正月二十七日、後白河院女御平滋子の家司職事侍等が補されたが、その中に右衛門尉としてかれの名が見える（『兵範記』同日条）。一方、『兵範記』の翌年二月十六日条には左尉として「平成房」が見える。仁安四年正月十一日、「検非違使元の如し」で従五位下に叙され（『兵範記』同日条、嘉応二年（一一七〇）四月十七日の賀茂祭の路頭行列中に「大夫尉業房」が見える（同）。その後、相模守に任じたことが知られ（『山槐記』安元元年（一一七五）八月十・十一日条、治承三年（一一七九）正月五日に正五位下に叙されている（同書同日条）。

〈つ〉家満 『兵範記』仁安三年三月九日条に、帯刀として平家光が見える。

### Ⅲ 正季流

〈い〉範季 Ⅱ 〈い〉の範季と重出か。

〈う〉季房 『魚魯愚鈔』中巻『史料拾遺』第五巻、二五九頁に、平季房が「行大原野行幸事所功」をもつて諸司允を望んだことが見え、一方、『兵範記』仁安三年（一一六八）十二月十三日条の除目入眼の記事に「大炊允平季房、囁」とあつて対応する。

〈え〉季宗 『中右記』元永二年（一一一九）九月二十一日条に北面下臈として平正盛・平貞賢・平盛兼らとともに「平季宗、頼」と見えるが、この人物は世代的に整合しない。なお、『桓武平氏諸流系図』には「或本季宗貞宗季等者盛光孫貞光子云々」と注記している。佐々木紀一氏は、この「宗貞宗季」を家貞・家季の誤りとする（『桓武平氏正盛流系図補輯之落穂』『米沢国語国文』第二五号、一九九六年）。ちなみに、家季については『兵範記』仁安元年（一一六六）十月二十一日条の臨時除目の記事に「左衛門志平家季」と見える。

〈お〉宗清 『殿暦』天永二年（一一二二）二月七日条に、検非違使宗清が右衛門尉宗実らとともに高陽院の事始の慶賀に赴いたという記事が見えるが、これも世代があわない。一方、『兵範記』仁安三年七月三日条には、この日の小除目で右衛門少尉平宗清が左衛門少尉に転じたことが見え、また、『吉記』安元二年（一一七六）四月二十七日条にも左衛門尉平宗清が所見する。こちらは時代的に整合するであろう。なお、かれが平頼盛の家人であつたことなどについては、西村隆氏の「平氏「家人」表―平氏家人研究への基礎作業―」（『日本史論叢』第一〇号、一九八三年）を参照されたい。

〈か〉家貞 平清盛の一の郎等として著名で、筑後守に任じた。その閥歴や係累については、西村隆「平氏「家

人」表—平氏家人研究への基礎作業—」に、また、子息貞能と二代にわたる鎮西における活動については、工藤敬一「鎮西養和内乱史論」(同著『莊園公領制の成立と内乱』思文閣、一九九二年、初出一九七八年)に詳しい。受領補任以前の官歴の大略を記すと、長承三年(一二三四)閏十二月十二日、海賊追捕の賞によって兵衛尉から左衛門尉に昇任(中右記)同日条、仁平四年(一二五四)正月二十三日、檢非違使宣旨を蒙り『兵範記』同日条、久寿二年(一二五五)正月六日、従五位下に叙されている(同)。ちなみに、『兵範記』嘉応二年(一二七〇)四月十九日条に「武士一人、故家貞次男云々、郎等十騎」と見える。

〈き〉貞能 父家貞同様、平家中枢の有力家人として著名であり、筑前・肥後の受領を歴任した。それ以前の官歴を見ると、『兵範記』保元元年(一一五六)九月十六日条に平貞良が右馬少允に補任されたという記事があり、『山槐記』永暦元年(一二六〇)十一月十五日条には檢非違使とある。長寛三年(一二六五)七月二十五日、六条天皇の即位にともなう叙位で従五位下に叙され『山槐記』同日条、『兵範記』仁安元年(一二六六)十月十日条には「左大夫尉平貞能」と見える。同書の翌年八月十八日条には、左衛門少尉従五位上平朝臣貞能の復任除目の記事がある。筑前守に任じたのは仁安四年春の除目においてのことであった(『兵範記』正月十一日条)。

〈く〉道貞 仁安三年十一月、左兵衛尉平道貞は大嘗会悠紀方に私物万疋を進納することを条件に勅負尉の拝任を申請し、翌月の除目で希望どおりに左衛門尉に補されている(『兵範記』十一月四・六日、十二月十三日条、『山槐記除目部類』十二月十三日条)。なお、次項に示したように、道貞(道定)は貞頼と同一人物である。

〈け〉貞頼 『兵範記』嘉応元年(一二六九)十一月二十五日条に、この日進発した八十島使の行列中に随兵七十人(親昵の者二十人、郎等五十人か)を引率した「武士左衛門尉平貞頼」が所見する。また、同じく翌年四月十九日条にも左衛門尉として「平定頼」が見える。佐々木紀一氏は、右の八十島使下向の記事が「愚昧記」同日条にも見

え、そこに「胡籙負、筑前守貞能一男通定、郎等七十人相具也、此中二十人一門者云々」とあることから、ここに見える通定が貞頼と同一人物であることを明らかにしている（『桓武平氏正盛流系図補輯之落穂』）。

〈さ〉貞清 『魚魯愚鈔』中巻（『史料拾遺』第五巻、二七〇頁）に、承安二年（一一七二）の春の除目にさいして、美作大掾平定清が右近將監拜任の申文を提出したことが知られるが、同定の可否は不明である。

#### IV 兼季流

〈あ〉兼季 『中右記』承徳元年（一〇九七）閏正月三日条から、この日「左尉」兼季が検非違使の宣旨を蒙ったことが知られるが、四月十八日条には「検非違使右衛門尉」とある。翌年、かれは流人大江仲宗の郎等四郎大夫を追捕し、その功によって大夫尉に叙留されている（同書二月三十日・三月十二日条。大夫尉としての最後の所見は『長秋記』天永四年（一一一三）正月十六日条で、『中右記』永久二年（一一一四）十一月四日条には上総守（介）と見える。この日、検非違使藤原盛道が強盜七人を逮捕したが、主犯の源四郎大夫源武は兼季の郎等であつたという。ちなみに、同書同年四月十三日条に兼季の子で右兵衛尉だつた者が齋院御禊の前駆をつとめたことが見える。

〈う〉貞兼 『中右記』康和五年（一一〇三）十二月二十九日条に、追捕犯人の賞による小除目が行なわれ、平定光が木工允、平貞兼と藤原盛道が右兵衛尉に任じられたことが見える。

〈え〉盛兼 『中右記』天永二年（一一二二）四月十四日条に「馬允」とあり、同永久二年（一一一四）九月二十一日条には、兵衛尉盛兼が強盜を召し進めたという記事が見える。『長秋記』元永二年（一一一九）六月十九日条には「左兵衛尉」と見え、『中右記』の同年九月二十一日条には「北面下臈」とある。その後、保安五年（一一二四）

四月までの間に左衛門尉に任じて検非違使宣旨を蒙り、この年六月には通仁親王家の御監に補されている（永昌記四月十四日・六月二十二日条）。『中右記』大治四年（一二二九）閏七月二十五日条には「検非違使本院北面」とあり、十一月十三日条には、源為義ら検非違使の追捕をうけて上洛してきた南都の僧朝覚を盛兼が京中で逮捕したことが見える。長承三年（一二三四）正月五日、従五位下に叙留され、さらに同年五月十五日、賀茂行幸にさいして従五位上に昇叙されている（『中右記』同日条）。『本朝世紀』久安三年（一二四七）七月二十四日条に「佐土守平盛兼」と見え、同五年十二月三十日条からは、和泉守に補任されたことが知られる。かれが子息盛兼の濫行事の謝罪として左府藤原頼長に一族の名簿を提出し（『兵範記』久寿二年（一一五五）二月一・八日条）臣従していたことは、すでに西村隆氏の指摘するところであるが（平氏「家人」表）、『台記別記』仁平元年（一一五二）六月二十六日条によると、この日の春日詣定において、八月十一日の佐保殿における上達部殿上人の担当に「盛兼朝臣」があてられており、その関係はさらに遡るのかもしれない。しかし、これも西村氏の指摘するように、久寿二年八月一日、「法皇仰」を受けたかれは、随兵数千を率いて「院内陣頭等」の守護にあたり（『兵範記』同日条）、また保元の乱のさいも後白河天皇方として独立した武力を構成していた（同保元元年七月五日条）。なお、『兵範記』仁安三年六月十二日条に、この日に六位で昇殿をゆるされた高階仲基について「年廿六、散位仲行男、母前和泉守平盛兼女」と見える。

〈お〉信兼 かれについては、すでに西村氏のほか、田中文英氏（平氏政権と摂関家領）同著『平氏政権の研究』思文閣出版、一九九四年、初出一九六八年）、飯田悠紀子氏（平氏時代の国衛支配形態をめぐる一考察）『日本歴史』第二二六号、一九七〇年）・石丸熙氏（院政期知行国制についての一考察——とくに平氏知行国の解明をめざして——『北大文学部紀要』二八号、一九七一年）・高橋昌明氏（伊勢平氏の成立と展開）『日本史研究』第一五七・一五八号、一九七五年）・角田文衛氏（平家後抄——落日後の平家——朝日新聞社、一九七八年）・棚橋光男氏（伊勢平氏の基盤をめぐって）『歴史公論』六五号、一九八一

年）・稲本紀昭氏（『曾禰庄と平信兼』『日本史研究』第三四号、一九八二年）・正木喜三郎氏（『古代末期における平信兼の動向について』竹内理三先生喜寿記念論文集刊行委員会編『莊園制と中世社会』東京堂出版、一九八四年）・川合康氏（『治承・寿永内乱と和泉国』岸和田市史編さん委員会編『岸和田市史』第2巻 古代・中世編 一九九六年）等が、その閲歴や伊勢における勢力圏、また権門との関係等を明らかにしているが、あらためて、その官歴を一瞥しておく。仁平二年（一一五二）春の除目で兵衛尉から左衛門少尉に転補された（『山槐記』正月二十二日条）。『兵範記』同年三月二十九日条には「殿上五位信兼」と見える。同書同四年正月三十日条にも高陽院殿上人として信兼なる者が所見。同じく二月二日条の「春日詣前駈人々装束目録」は、その官職を越後権守としているが、これらは別人であろう。久寿二年二月一日、信兼は左大臣頼長と乗合事件を起こし、四月十四日に左衛門少尉解官の憂き目にあったが（『兵範記』同日条、翌年五月十九日、左衛門権少尉に還着。保元二年（一一五七）春の除目のさい、檢非違使宣旨を蒙った（同書正月二十四日条。翌年八月二十五日、後白河院の鳥羽殿御幸に供奉した北面のなかに六位の檢非違使として所見（『山槐記』同日条。永暦元年（一一六〇）九月二日、從五位下に叙されて大夫尉となった（同。仁安二年（一一六七）十二月三十日、河内守に任じ（『兵範記』同日条、承安二年『山槐記』治承三年（一一七九）正月六日条には和泉守として所見し、同十九日条から、この日信兼が「別功賞」によって正五位下に昇叙されたことが知られる。ちなみに、これと同時にかれの子息檢非違使右衛門尉兼隆は、父との不和のゆえに信兼の申請によって解官されている。清盛によるクーデター直後の治承四年（一一八〇）春の除目で、かれは秩滿した和泉守から出羽守に転じている（『玉葉』正月二十八日条・『山槐記除目部類』同二十七日条。この時、和泉守には信兼の姉妹の夫にあたる高階仲基（盛兼の項を参照）が「親服による名替」によって任じられており、この一族と和泉国の深いつながりが想定される。なお、摂関家と和泉国および盛兼・信兼の関係については、元木泰雄「和泉守藤原邦綱考」（『泉佐野市史研究』第三号、一九九七年）

を参照されたい。

〈か〉兼高 源頼朝の拳兵のさいに討たれた伊豆目代山木判官兼隆である。『吉記』安元二年（一二七六）四月二十一日の賀茂祭の記事に、検非違使の右尉として平兼隆が見える。『山槐記』治承二年正月二日条に「大夫尉兼隆」、同書の翌日の条には「六位尉」、七日条には「五位」として所見する。また、翌年正月三日の条には「右尉平兼隆」と見える。なお、前項参照。

## V 季衡流

〈あ〉季衡 かれの閏歴については、高橋昌明『清盛以前』（四八頁）に詳しい。若干補足を加えると、『除目大成抄』第六（『新訂増補史籍集覧』別巻一、四一七頁）によつて、康平七年（一〇六四）秋の除目のさい、季衡が督藤原俊家の請によつて左衛門少尉への補任を望んだことが知られる。また、承保四年（一〇七七）十一月二十三日、かれが斎王帰京の事によつて伊勢に下向していること、同年十二月二十一日に本所で飼われていた厩鶴毛馬一疋がかれのもとに送られていることは（ともに『水左記』同日条）、季衡と伊勢在地や馬との関係の深さをうかがわせて興味深い。

〈う〉盛良 高橋昌明『清盛以前』（七二頁）に、かれが源義親追討のさい、正盛の軍に従い、論功行賞で左兵衛尉に補任されたこと（『中右記』天仁元年（一一〇八）正月二十四日条）が述べられている。また、『中右記』天永三年（一一一二）二月十四日条には、かれが、昨日、強盗一人を進めたとある。『殿暦』永久五年（一一一七）四月二十六日条に「尾張目代男盛良」が上洛したという記事があるが、これと同定できるかは不明（なお、菊地紳一・宮崎康充



『国司一覽』〈児玉幸多ほか監修『日本史総覧Ⅱ』新人物往来社、一九八四年〉によると、時の尾張守は源師俊。『中右記』保延四年（一一三八）正月二十二日条には、この日の除目のさい、かれが平清房とともに検非違使宣旨を蒙ったことが見える。なお、『殿暦』天仁二年九月六日条に右馬允盛良が見える。

〈え〉盛光 『本朝世紀』康和五年（一一〇三）十二月二十九日条に見える「帶刀左京進「成」光」は、佐々木紀一氏の指摘どおり「盛」光の誤りであろう（桓武平氏正盛流系図補輯（上）『国語国文』七三六号、一九九五年、なお、〈か〉貞光参照。一方、『兵範記』仁安四年（一一六九）正月十一日条の除目の記事にも右京少進平盛光が見えるが、季衡の子の世代とは時代が整合しない。

〈お〉盛行 高橋昌明『清盛以前』（七三頁）に、『為房卿記』康和五年十月二十一日条に平貞光とともに正六位上帶刀として見えることが指摘されている。なお、『兵範記』仁安三年二月十五日条に「滝口平盛行」が見えるが、これとは世代と時代が整合しない。

〈か〉貞光 高橋昌明『清盛以前』（七三頁）に、『為房卿記』康和五年十月二十一日条に平盛行とともに正六位上帶刀として見えることなどが指摘されている。また、佐々木紀一氏は、このことが『仲章記』（『歴代殘闕日記』三）同日条にも見えることと『本朝世紀』康和五年十二月二十九日条に、「帶刀左京進成（盛光男）」の平定光が東宮御所辺で犯人を追捕した賞によって木工允に任じられたことなどを指摘している（桓武平氏正盛流系図補輯（上））。なお、このことは『中右記』同日条にも所見がある（Ⅳ〈え〉貞光参照）。

〈け〉盛国 『殿暦』康和三年八月十八日条に侍の一人として「盛国」、『中右記』長治元年（一一〇四）三月二十四日条に左衛門尉平盛国が所見する。一方、『除目大成抄』第七（『新訂増補史籍集覧』別巻一、四三三頁）に、保安二年（一一二二）春の除目にさいして、明法道から「学生正六位上平朝臣盛国」を諸司三分の欠に補任すべき旨の

申文が収められており、かれが内蔵少允となつたことが知られる。この人物は文官なので、『中右記』大治六年（一二三二）十二月二十二日条に録事のうちに見える盛国に同定できるかもしれない。ついで、同書長承元年（一二三三）五月二十日条に「馬助盛国」、翌二年二月九日条に春日祭上卿頼長の供人のうちの諸大夫十七人の散位のなかに「盛国」があり、同四年四月一日条の齋院司除目の記事に伊勢守平盛国が所見する。養和元年（一二八二）閏二月、平清盛はその家司であつた平盛国の九条河原口の家で死去しているが（『吾妻鏡』四日条など）、上記二人の盛国はこれとは別人である。なお、清盛の家司・郎等であつた主馬判官盛国については、佐々木紀一「桓武平氏正盛流系図補輯（上）」を参照されたい。

＜こ＞盛康 『中右記』康和五年四月八日条に刑部丞と見え、『殿暦』同月十七日条に、「解刑部丞任兵衛尉」とあつて、その昇任が知られる。『中右記』同日条には「候院人」とある。天仁元年（一一〇八）正月、源義親追討賞によつて正六位上をもつて右衛門権少尉に任じたことが『除目大成抄』第八（新訂増補史籍集覧）別巻一、五八二頁および『中右記』同月二十四日条から知られる。後者には「正盛男」とあり、高橋昌明氏は猶子的存在と見る（『清盛以前』七三頁）。その後、『長秋記』元永二年（一一一九）六月十九日条に右衛門尉、保延元年（一二三五）二月二十七日条に検非違使として所見し、『中右記』同三年正月五日条から外衛として従五位下に叙されたことが知られる。

＜さ＞盛範 『台記別記』久安三年（一一四七）三月二十八日条に右兵衛尉、『台記』久寿元年（一二五四）九月十六日条・『兵範記』保元三年（一一五八）十月二十三日条に兵衛尉と見える。同仁安二年（一二六七）十二月十六日条には散位とある。

＜し＞盛長 『兵範記』仁安三年十二月十日条の除目の記事に右衛門少尉として平盛永が見える。

＜す＞盛仲 仁安三年二月、高倉天皇にわたされた六条天皇の滝口三膳以上として平盛仲が見える（『兵範記』十

九・二十八日条。かれは翌年正月の除目で左馬允に任じている（同十一日条）。

## VI 正扶流

〈あ〉正扶 記録には正輔と表記される。高橋昌明『清盛以前』（三五頁以下）に詳しい。東宮帶刀、檢非違使の官歴を有し、平忠常の乱のさい安房守に登用されたが、伊勢在地における公雅流平致経との紛争によって任地に赴かなかった。なお、寛弘三年（一〇〇六）六月、かれが秀郷流藤原氏の左衛門尉文行と鬭諍事件を起こしたことや、その背景については拙著『坂東武士団の成立と発展』（弘生書林、一九八二年）を参照されたい。

## VII 正済流

〈あ〉正済 長和元年（一〇二二）の除目で、褰帳典侍の申請により正六位上をもって玄蕃権助に任じられたことが『除目大成抄』第六（『新訂増補史籍集覧』別巻一、三八九頁）および『魚魯愚鈔』上巻（『史料拾遺』第四卷、二〇四頁）から知られる。

〈い〉正家 『今昔物語集』卷十三第三十八に、信濃国に所領をもち、子息が「大学ノ允資盛」という「左衛門ノ大夫平ノ正家」が登場する。一方、『兵範記』仁安二年（一二六七）正月二十七日条に、女御平滋子の侍所職員として「散位平朝臣正家」、同三年九月十九日条に、参内する檢非違使別当平時忠の前駟の一人として「民部大夫政家」が所見するが、これは世代が合わない。

〈う〉資盛 前項に述べたように『今昔物語集』に大学允と見える。白河院の近習であつたようで、大治四年

(一一二九) 七月七日、院の死去にさいして枕辺に祇候しており、このとき安芸守であつた(『長秋記』同日条)。『中右記』同年閏七月二十五日条の四十九日法事の記事には「本院北面」と見える。翌年十二月、待賢門院の熊野参詣にさいしては、進物所の預をつとめている(同日条)。天承元年(一一三二) 七月九日、白河院の遺骨が鳥羽塔に移されたときの供奉人の中に「北面者安芸守資盛」が見える(『長秋記』同日条)。『長秋記』長承三年(一一三四) 六月十九日条にも安芸守として見え、また同書保延元年九月二十九日条にも所見する。

〈お〉有盛 『兵範記』久寿二年(一一五五) 十月二十六日条に「式部輔代武藏権守有盛」が見える。同書仁安三年十二月十日条に、平頼盛家人の右兵衛尉平有盛が解官されたことが見えるが、前者とは別人であろう。

〈く〉叙弘 『兵範記』仁安三年正月十五日条の除目下名の記事に、内舎人として平信弘が見えるが、叙弘との比定は世代的に不審である。

〈し〉貞弘 年代は不明だが『魚魯愚鈔』中巻(『史料拾遺』第五卷、二五八頁)に、平貞弘が右兵衛少尉に任じたことが見える。かれの名は『後一条師通記』応徳三年(一一八六) 九月二十六日条に見え、同書寛治六年(一一九二) 正月十八日条、『中右記』寛治五年二月十七日・同九月二十四日・同八年正月七日・永長元年(一一九六) 七月十日条に検非違使、同書寛治六年正月十八日・永長元年二月二十二日条には検非違使・左衛門尉として所見する。また、同書承徳元年(一一九七) 正月五日条に、この日の叙位で「外衛左使」のかれが従五位下に叙されたことが知られ、寛治八年三月八日条には検非違使大夫尉と見える。なお、『兵範記』仁安四年(一一六九) 四月十六日条に見える「豊前権守平貞弘」が別人であることはいうまでもない。

〈す〉正弘 『中右記』天永二年(一一二二) 十一月十九日条に、院で闘乱事件をおこしたために停任されてい

た左衛門尉平清賢と右衛門尉平正弘の還着がゆるされたことが見える。『長秋記』元永二年（一一一九）六月十九日条には左衛門尉とあり、『永昌記』保安五年（一二二四）四月十四日条には検非違使尉として見える。その後、『中右記』大治四年（一二二九）四月二十五日・七月十五日・同二十六日、十一月十二日、『長秋記』大治四年四月二十五日、天承元年（一二三二）九月二十日条に所見する。保元の乱で崇徳上皇方に立ったため、保元元年（一一五六）八月三日、陸奥に配流され（『兵範記』同日条、翌年三月二十五日、「散位平正弘領」（伊勢国大井田御厨・笠間御厨・石川御厨・富津御厨、信濃国麻績御厨・高田郷・市村郷・野原郷、越後国魚野郡植田村）は後院領とされた（同二十九日条）。

《せ》家弘 『中右記』大治五年正月二十八日条の除目の記事に、平家弘が右兵衛尉に補任されたことが見える。

『台記』・『宇槐記抄』久安七年（一二五二）正月七日条に左衛門尉家弘が検非違使の労によって従五位下に叙されたとある。仁平二年（一二五二）九月十日の夜、崇徳院の御所に皇后宮前侍長源満義とその妻（上総介源資賢女・弟が入りこんで刃傷に及び、満義が自殺をとげるといふ事件が発生したが、そのさい、家弘は武者所とともに犯人を搦め捕らえている（『台記』同十二日条。保元の乱にさいしては、崇徳院が白河殿に召集した軍勢の筆頭に「散位平家弘」の名が見え、かれは源為義とともに院判官代に任じられ、直接院の御前に召されている（『兵範記』保元元年七月十日条。七月二十七日に下された罪名宣下のリストには「右衛門大夫平家弘」と見え、同三十日、頼弘ら一族とともに大江山辺で斬刑に処せられた（同書同日条）。

《そ》頼弘 前項参照。

《ち》康弘 『兵範記』仁平四年（一二五四）六月十九日条によつて、十七日の大学寮試で「正六位上平朝臣康弘」が擬文章生に補されたことが知られ、同二十四日条の「登省輩十五人貢挙次第」には「新院」の挙として「平康弘、家弘」と見える。『除目大成抄』第十（『新訂増補史籍集覧』別巻一、六六六頁）に収録されている久寿二年（一一

五五) 十一月日「文章生歴名注進状」には「正六位上平朝臣康弘 新院北面衆」とある。保元の乱の記事には「大炊

助平康弘」と所見。乱後、家弘らとともに処刑された。

〈つ〉 盛弘 保延五年(一二三九)六月二十七日、皇后宮侍二人が闘諍に及んださい、侍長だった盛弘は前馬助平忠正とともに、これを鎮め、七月二日、その賞として兵衛尉に補されている(『台記』同日条)。仁平三年(一二五三)の左大臣頼長の春日詣にさいして、右衛門尉であつたかれは東遊の舞人をつとめた(『台記別記』八月八日、十一月十七・二十一・二十六日条、『兵範記』十一月二十六日条。『兵範記』久寿三年(一二五六)四月二十二日条に兵衛尉盛弘と見えるのは、官職か人名の誤りであろう。保元の乱にさいしては、崇徳院が白河殿に集めた軍兵に右衛門尉平盛弘の名が見え、乱後、家弘らとともに処刑された。

〈と〉 時弘 仁平三年の左大臣頼長の春日詣にさいして、左兵衛尉であつたかれは東遊の舞人をつとめた(『台記別記』八月八日、十一月十七・二十一・二十六日条、『兵範記』十一月二十六日条。保元の乱にさいしては、崇徳院が白河殿に集めた軍兵に兵衛尉として見え、乱後、家弘らとともに処刑された。

## VIII 正能流

〈あ〉 正能 『小右記』万寿四年(二〇二七)四月六日条に「(左兵衛カ)尉平正能」、『春記』長暦二年(二〇三八)十二月十四日条に「刑部少輔正能 惟衡之太冠云々」とある。『尊卑分脉』には所見しないが、佐々木紀一氏の紹介した新出古系図の貞衡の注記に「母同正能」と見える(「桓武平氏正盛流系図補輯之落穂」)。

〈い〉 貞弘 VII 〈し〉 貞弘の重出であろう。

〈う〉正弘 VII 〈す〉正弘の重出であろう。

〈え〉宗能 『中右記』 承徳元年（一〇九七）正月三十日条の除目記事に「縫殿少允平宗良」が見えるが、世代と時代が整合しない。

〈お〉康弘 VII 〈ち〉康弘の重出であろう。

〈き〉有盛 VII 〈お〉有盛の重出であろう。

〈け〉正綱 『尊卑分脉』には、忠盛の弟忠正の子に正綱（宇治左大臣勾当）があり、この人物と同定できよう。保元の乱のさい、崇徳院方に立つたために、乱後、平忠貞（忠正）らとともに六波羅辺で斬刑に処せられている

〔兵範記〕保元元年七月二十七・二十八日条。

〈こ〉敦盛 VII 〈え〉敦盛の重出であろう。

〈さ〉兼光 VII 〈か〉兼光の重出であろう。

## IX 貞衡流

〈あ〉貞衡 貞衡の史料所見およびこの系統の評価については、高橋昌明『清盛以前』（四九・七四・七五頁）を参照されたい。

〈い〉貞清 『中右記』 康和五年（一一〇三）四月八日条に、御禊前駈として右衛門尉の平定清が見える。一方、同大治五年（一一三〇）十一月二十二日条に、院の熊野詣に従う庁官五人の一人として貞清が所見。仁平三年の左大臣頼長の春日詣にさいして、左兵衛尉であった平貞清は東遊の舞人をつとめた（『台記別記』八月八日、十一月二十

一・二十六日条、『兵範記』十一月二十六日条。久寿二年（一一五五）四月十四日の小除目で左兵衛尉平貞清は「信兼替」として左衛門尉に任じている（『台記』・『兵範記』同日条）。『兵範記』同年六月八日、左大臣頼長北政所の葬礼の記事に、貞清は侍として所見する。『中右記』大治五年の貞清は措くとしても、康和五年の定清と『台記』などに見える平貞清は明らかに別人である。さらに、保元二年（一一五七）の秋除目で左兵衛少尉に補された平貞清もあるが（『兵範記』十一月二十七日条、上記の者とは別人である。いずれを比定すべきか判断は留保せざるをえない。なお、Ⅲ〈さ〉貞清も参照。

へえ 維綱 高橋昌明『清盛以前』（七三・八二頁）に、清盛の異母弟家盛の乳母夫で、家盛死去の時、右衛門尉だったかれが剃髪したこと（『本朝世紀』久安五年（一一四九）三月十五日条）や、右衛門尉補任が忠盛の海賊追討に従軍した行賞によるものであることなどが指摘されている。これ以外の所見としては、大治五年（一一三〇）八月二十三日に左馬允に任じ（『中右記』同日条、保延元年（一一三五）八月二十一日、忠盛による海賊追捕の賞としていたん右兵衛少尉に任じてから（同）さらに右衛門尉に補されたらしい（『長秋記』同日条）。なお、『兵範記』久寿三年（一一五六）五月二十六日条に尾張守に補された維綱が見えるが、これは『公卿補任』の保元三年の条から藤原惟方の子であることが知られる。

へか 家綱 『除目大成抄』第六（『新訂増補史籍集覧』別巻一、三九六頁）から、治承三年（一一七九）の除目にさいし、正六位上平朝臣家綱が平盛子の年給二分代として内舍人への任官を望んだことが知られる。



## まとめにかえて―展望と課題―

伊勢平氏庶流における官歴の一般的なパターンは、兵衛尉から衛門尉に昇任して検非違使官旨を蒙り、叙爵して大夫尉となったのちに受領に任ずるというものであった。衛府尉以前の官歴については、Ⅲへき貞能やⅣへえ盛兼のように馬允であった者があり、その場合は、Ⅴへす盛仲のように前任が滝口である者が見られる（院政期の滝口については、米谷豊之祐「滝口武者考」同著『院政期軍事・警察史拾遺』参照）。しかし、Ⅴへこ盛康のように刑部丞から兵衛尉に転じたケースもあった。なお、Ⅵへあ正扶（正輔）をはじめⅤへお盛行などのように帯刀（東宮坊帯刀舎人）からスタートした場合、東宮が踐祚・即位すると、帯刀舎人のうち帯刀長・部領など上位の職務にある者は衛府尉、三番は馬允、歩射腋・連は治部允・少監物・木工允などに任ずることを得た（笹山晴生「春宮坊帯刀舎人の研究」同著『日本古代衛府制度の研究』東京大学出版会、一九八五年、初出一九七二年）。院政期には帯刀の方が渡辺党のメンバーなどが任じられた滝口より上格で、有力な京武者の子弟から選抜されたから、伊勢平氏庶流はこれにふさわしい存在だったといえる。

ところで高橋昌明氏は、維衡・正度の時代までの伊勢平氏にとって受領は歴任するものであったが、正度の子の世代以降、それは官歴の最後を飾るものとなったと見て、伊勢平氏の侍身分上層への地位の低下を指摘している（『清盛以前』四九頁）。

Ⅰへか宗盛の項で述べたように、承暦三年（一〇七九）四月、関白師実の賀茂社参詣のさいに、正衡は左衛門尉盛方・右衛門尉兼衡・同宗盛・左兵衛尉兼季ら平氏一族（このうち盛方は『桓武平氏諸流系図』・『尊卑分脉』に、平忠常の乱のさい、はじめに追討使に任じた平直方の子ないし孫として所見）とともに舞人をつとめていて（『為房卿記』十一日条・

『参軍要略抄』、ほかの一族と同等の立場にあった。そして、正衡は検非違使から出羽守に任じて、その官歴を終わっている（『本朝世紀』康和元年正月二十日条）。

これが、ほかの一族と階層的に一線を画するようになった時点は、正盛が前隠岐守として所見する承徳二年（一〇九八）正月二十七日（『中右記』同日条）から、若狭守在任が確認される康和三年九月（一一〇二）九月二十三日（『平安遺文』一四五三号）までの間に求められるであろう。そして、それ以後、伊勢平氏の一族の中には、院近臣として軍事権門化した正盛流（平家）に従属する者が増加していったのであった。

しかし、Ⅳ（へ）盛兼・（へ）信兼のように独自に院や摂関家に奉仕しながら諸国の受領を歴任し、位階も従五位上ないし正五位下に到る存在もあった（信兼の官職が平家の推挽によるものではないことや、内乱期におけるかれの主體的な行動については、正木喜三郎「古代末期における平信兼の動向について」参照）。信兼の子兼隆が伊豆目代に任じられたことについては、あたかもかれが平家一門であったことによるかのような理解がされることがあるが、かれは知行国主時忠の検非違使担当在任時、その配下に属した経歴があり、目代登用はあくまでも時忠との関係によるものと見るべきであろう。伊勢平氏庶流と平家本流との政治的な存在基盤の相違は、保元の乱のとき、崇徳上皇方に参じたⅦ（す）正弘とその子息たちの動向にも見る事ができる。以上のことから明らかなように、個々の伊勢平氏庶流にたいする政治的立場・存在形態についての考察が要請されるのである。

ところで、この正弘の所領には信濃国に属するものが多い。治承・寿永内乱のさい、正弘の子で同国布施御厨を名字地とする惟俊、孫で富部御厨を名字地とする家俊が平家方に立ったといひ（井原今朝男「信濃武士の登場」『長野県史 通史編 第一巻』長野県史刊行会、一九八九年）、正弘の信濃国内の所領にたいする支配はかなり徹底したものであったようだ。前述のように、Ⅶ（へ）正家も信濃に所領を有していたが、『今昔物語集』の説話によれば、正家は頻繁

に京都と信濃の間を往復しながら所領の経営にあたっており、子息の資盛も少年期を信濃ですごしたらしい。また、天養二年（一一四五）五月、同国水内郡小川庄で下司清原家兼が在地住人の池田宗里に殺害されるという事件が発生したとき、家兼の地位の継承を主張して平維綱がこれに介入したことが知られる（『平安遺文』二五五八号）。この維綱はⅨへゝ維綱に同定され、ここにも伊勢平氏庶流の信濃進出の形跡が見られる。ちなみに、Ⅰへけゝ盛基の信濃守補任も注目されよう。

このほかにも、系図に名は見えないが、院政期の信濃国には安曇郡仁科御厨の仁科氏や高井郡笠原牧の笠原氏など平氏系武士の進出が顕著である（井原今朝男「信濃武士の登場」参照）。その背景には、信濃国の交通上の重要性や、多くの牧の存在などの事情が想定できるが、この問題については、平賀氏など河内源氏系の進出ともからめて今後の課題としたい。

Vへけゝにあげた盛国が学生、Ⅰへおゝ貞度・Ⅶへち康弘が文章生から立身をはかっているのは武士の職能論の観点から興味深い、同じような例は河内源氏の源義業にも見ることができる。義業は常陸佐竹氏の祖となった人物で、文章生から検非違使尉に到ったが、在京したかれに代わって常陸の所領は在国の子息昌義に委ねられていた（米谷豊之祐「佐竹家の祖―源義業」）。このような、父子・兄弟による在京奉公と在地所領支配の分業は上野・下野の新田・足利氏など当時の京武者系豪族的武士一般に見られるようである（新田・足利氏については、須藤聡「平安末期清和源氏義国流の在京活動」『群馬歴史民俗』第一六号、一九九五年、「京武者系豪族的武士」については、拙稿「豪族的武士団の成立」元木泰雄編『院政の展開と内乱 日本の中世史』吉川弘文館、二〇〇二年を参照）。この点についての掘り下げもまた、今後の課題としなければならない。

Ⅱへいゝ範季の項であげた前佐渡守平資範や前隠岐守平資季は系図に所見しないが、おそらく伊勢平氏に属する有

力者とみなされる。こうした存在にたいする追究も進める必要があるだろう。

さらに、平家に従属した伊勢平氏庶流個々の在り方についても、たとえば平家が池家・小松家などに分立する形をとったとき、その主従関係はいかなる様態をとるようになるのかといった点も具体的に検討していかなければなるまい。

以上、多くの課題を提起して、ひとまずこの作業を終えることとする。

〔付記〕 平成十三年度の個人研究「後白河院と平家」における主要課題は「平家と後白河院の政治的連携が、隣接する六波羅と法

住寺殿の空間構造にどのように反映しているのか」という点にあったが、これらについては「列島ネットワークの中の平泉」(人間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界 奥羽史研究叢書3』高志書院、二〇〇二年)で多くを述べる機会があったので、この紀要には今後「平家論」を進める上で大前提となる伊勢平氏庶流に関する日頃の調査成果を掲載することとした。なお、史料所見はあくまでも管見の範囲にとどまるものであり、これ以外の知見に関して広く御教示をお願い申し上げたい。

〈キーワード〉

院政 伊勢平氏 武士